

原 著

三人のユダヤ人学者の人間疎外論
第三部 人間疎外の弁証法的跳躍 — G.ジンメルの特外論

The Alienation in G. Simmels philosophy

能 木 敬 次
Keiji Nohgi

1850年代後半、フロイトとほぼ時を同じくして出生し、半世紀余り華々しく学問的なキャリアをつんで、フロイトよりも20年も早世したゲオルク・ジンメル、二人は学位を取得して私講師となり、40歳を過ぎてやっと員外教授となるなど、似かよった経歴を持つ。一貫して大学の教壇に生活の糧と自己の思想発展の拠り所としたジンメルに対してフロイトは双方の要件ともあまり大学との関係を密にはしていなかったようだが。

主観と客観、存在と形式、価値評価としての認識、現実に対する理念の要請という哲学的な視点、つまり新カント学派の認識手法をもってジンメルは、貨幣の形而上学的意義、存在論、文化論に亘り幅広く思想展開をした。彼は晩年、医師から癌を告知されて、いよいよ彼の哲学の集大成となる仕事に着手に思い込んだかのように思われる。文化の本質とその概念および生の力動とその成果である文化の形式、そしてその生成物に対する生からの破壊行為という、生の果てしない生成と形成されてはつぎつぎと破壊され、そしてまた形成される形式としての文化という観点から、彼の生きた世紀末の文化現象を広く論じた。ジンメルの生きた時代、ベルグソン哲学の出現とその短い謳歌と凋落の後、新カント派の価値哲学が出現し、目まぐるしく哲学思想の流行が入れ代わる。その闘争の中に社会学、精神分析が参入する。新時代の科学の成果には目を見張るものがあり、科学主義が確固たる自信を抱く中、哲学は人間の側からなんとかしてそれに対抗すべく血眼になっているような感がある。

そんななか、フロイトと時代を同じくし、彼もまた文化とその本質について思いを巡らすにあたって独自の裕福な西方ユダヤ人の出自、大都会ベルリンでの生い立ち、大学人としてのキャリアをもった、都会人ならではのセンスと犀利な機智でペーター・ゲイやヨゼフ・ロート、S.クラカウアーなど同時代のユダヤ人が口をそろえて言うように、その思考の果てしない迷路のような思想を展開した。彼は思索の焦点を目まぐるしい進歩を遂げる科学の成果を伴って社会の個々の要素が有機体となって統一的に発展してゆく現代「文化」の本質の解明に焦点をあてた。文化現象 — 「社会制度、芸術作品、宗教、科学的認識、技術と民法」などを彼は人間の生がその不安、発展、進行から生み出した「形式」を規定する。この「形式」は「生」から生まれたものであるが、すぐさま「生」から解放を要求され、既存の「生」と対立する。¹⁾

「生が生み出した形式との対立 — このことが積もり積もって文化の総体的な困窮と

なる。ここで生は形式そのものをなにか自己に押しつけられたもののごとく感じる。」²⁾

「(生の形式たる) 文化現象は生がさらに進展するにつれて、生に対してかたくなな疎隔

を示し、いや生に対立するにいたるのがつねである。」³⁾

ここに我々はフロイトのかの言説、つまり「文化への不満」に似たもの、もしくは同様のものがジンメルによって同じ視点で読み取られているのを見てとることが出来る。文化としての形式を「押しつけられたのも」、「生と対立するもの」、「自己とは無縁のもの」、「暴力によって(生を) 圧倒する(もの)」といったジンメルの片言を拾い集めてみると、やはりフロイトの不満の言説と重なって見えるのは著者だけではないだろう。一方は六百年余りに亘ってヨーロッパを政治・文化の支配的な地位で君臨してきたハプスブルグ家の首都ウィーンで、もう一方は世紀末と20世紀中央ヨーロッパの首都、巨大政治・文化都市ベルリンで同じ文化的抑圧・「人間疎外」の状況の中に生まれ、息をし、その苦しさを感じてきた二人がシュベングラ以来、ヨーロッパ社会の文化的凋落とその特徴を社会に広く警告する必要を感じていたのだろうか。それにしても世紀末と第一次大戦後のベルリンは政治・経済の大混乱とそれに反比例するかのような文化の熱病のような高揚、上層・下層を含めたユダヤ人の文化的同化の問題及び都会文化の社会学的な考察のまたとない実験場であった。この時代のベルリンとウィーンの文化を同時代の普遍的・典型的な現象として、哲学的な考察の対象としたのは彼らだけではない。ゲイやロートはそこに生きるユダヤ人たちの切迫した精神生活を活写した。クラカウアーは誕生したばかりの映画芸術に文化の新たな息吹と時代の社会に生きる人間たちの不安な心象を読み解こうとした。

しかしそれでも二者間の見解、抑圧に関する姿勢はやはり異なる。それは二人のユダヤ人が心理学の新しい分野である精神分析(リビドー性格論)と時代の哲学(価値認識論)という分野を異にしていたという学問上の問題だけに起因するのではなく、ウィーンとベルリンの高い知性をもった都市生活者が都市に嗅ぎ取る息吹の違いにあるのかもしれない。

フロイトは文化を「家族・国家・社会などの社会機構」、「性生活」、「宗教」、「精神生活一般」と規定しているが、ジンメルが示す文化の範囲は都市生活における人為全般である。フロイトの「文化への不満」の主な原因は「性衝動」・「攻撃衝動」の抑制におきている。そしてその抑制・禁圧の過多を彼の病理学説である神経症の発症の原因へと結びつけている。この抑制・禁圧への不快感こそ人間の「疎外」感の謂いであるが、フロイトは科学者、医者らしく彼の文化論では現代ヨーロッパ社会・人類への警告を暗示のままに留めている。それに対してジンメルは人間の欲求とそれへの抑圧の構図を人間の生の営みそのも

の宿命ととらえて、自由の足掛がかりとしての距離と回避 — そこに積極的な価値を置くという、ジンメル独自の逆説的論理構造を見せている。ジンメルは都市生活における個人の矮小化・非人間的様相について分析する。彼は言う。

客観的文化の繁栄に個人はますます対抗できなくなる。⁴⁾

個人のとるにたらむもの (*quantité négligeable*) は、つまり微塵におし下げられ、この巨大な組織は全ての進歩と精神性をかすめ取っている。⁵⁾

非人格的になって結晶化した精神のきわめて圧倒的な充溢性が提供され、人格はいわばそれに対して自己を維持しえない。⁶⁾

他方で生活はますます非人格的なこのような（都会の）内容と提供物によって合成される。⁷⁾

ジンメルはここで一見、弁証法的な手法とも見える逆説的な論法を展開する。つまり、一度「否定されたもの（都会文化の非人間性）」否定性をもう一度、否定するのである。

大都会ベルリンの人を単なる一片のかけらへと押し下げる、非人格的な、否定的な力の圧倒ゆえに、その否定的な力の反作用としての「否定」として「自由」が生まれると言うのである。そのメカニズムは距離と回避の運動の中にある。そこに他の世界にはない「自由」が現出する。

（大都会の）外的な冷淡さの内面はたんに無関心のみでなく、あるかすかな嫌悪でもあり、相互の疎遠と反発であり・・・憎悪と闘争となる。この反感が距離と回避をひきおこす。・・・この解体と見えるものが現実にはその根本的な社会化形式のひとつにはかならない。⁸⁾

大都会人は小都会人を押し込めている狭量と偏見とは反対に「自由」である。⁹⁾

身体的接近と密着とが精神的な距離をはじめて明らかなものとする。¹⁰⁾

大都会の雑踏のなかほど孤独と荒涼とを感じるころがない。・・・しかし、これは明らかに自由の裏面にすぎない。¹¹⁾

「孤独と荒涼」が自由の裏面であり、他者への「距離と回避」が自由を手に入れる手段となる — このやや極端とも思える論理的引き付け、*Umschlag*（転回）はジンメルによるいわば大都会の生の発展の弁証法を端的に表現して

いる。都会の雑踏と混雑、即物的で一見、無機質な統御システムの中で精神の危機に晒されている人間は他者からの「距離」と他者の「回避」をもって「自由」を手に入れるのである。それもその自由は大都会ならではの特権なのである。ニューヨーク・ロンドン・パリをはじめベルリンも鉄道・自動車・高層大建築、そしてそれらの結びつける通信機関によって有機的な大組織が現出した。そのなかで個人は単なるブロックの一コマ、もしくは「塵」へと引き下げられてしまったという感情を誰もがいだいた。ジンメルはその「塵」への引き下げの方向に大空を跳躍する人間精神の自由を与えた。大量生産時代における人間の尊厳の問題、圧倒的な科学的・客観的事実に対する人間の主観的認識の問題への対処が当時の思想界の喫緊の問題であった状況で、ジンメルはその思想の方向性は常に形式主義的で明確な思想上の構成、具体的な形姿を示さなかったとはいえ、その意表をついた感性は当時の知識人を驚かせるには十分あった。

しかし、この思考の跳躍を与えた原動力はそれだけではない。それはユダヤ人ならだれでも遺伝的観念と彼らがおかれた現実的状况に示されている「異邦人」という感情であった。

〈歴史的ユダヤ人〉

実際、古来より多くのユダヤ人が異邦人という意識をもって放浪してきた。バビロンの捕囚まで遡らなくても多くのユダヤ人がゲットーに押し込められた。そこでは借地代や人頭税、竈税などが徴収され、裕福な者はさらに高い臨時的な税金が課され、そのうえ何かと適当な理由をつけて定期的に財産を没収されてきた。

近代での歴史的な事件はスペイン・ポルトガルでのユダヤ人追放令(1492,1496年)であろう。奇しくもコロンブスの西インド諸島の発見と時期を同じくしているが、1492年、イスラム勢力の最後の拠点であるグラナダが陥落してレコンキスタが完成した。この年にユダヤ人追放令が出されたことはスペイン王室がこの法令公布の計画を満を持して狙っていたのがうかがえる。ユダヤ人商人の多くは豊富な財をなし、中には王室財政にも深くくいこんでいる者もいたのでかなり大がかりな策謀であったであろう。数十万のユダヤ人が北方・東方ヨーロッパへと移動していった。なかでもオランダへ入ったユダヤ人はW. ゾンバルトによれば貿易の興隆や繊維産業の勃興のため資本提供に大きく貢献し、後の産業革命の下準備をしたといわれる。15世紀後半、東方へと移動したユダヤ人は多くがポーランド王カズィミエルツの庇護の下に入り、ガリチア地方(現在のウクライナ北部・スロバキア東部・ポーランド南部の一部)で勢力を得た。そこには数十万人のユダヤ人が居住し、ユダヤ人専用の学校・裁判所・大学に相当する高等教育機関もあったという。しかしそこでも現在のロシア領内にあたる地域でたびたびポグロム(ユダヤ人に対する虐殺)が起こっていた。1792年、フランス国民公会でユダヤ人解放令が採択され、すべてのユダヤ人に市民権とゲットー以外の居住権・職業の自由・不動産所有の自由・信仰の自由が与えられた。また、ナポレオンの施政指導の下に1812年、プロイセンでもユ

ダヤ人解放令が公布される。西ヨーロッパ・中央ヨーロッパではこのような政治的処置によってこれ以後、ユダヤ人に対して表立った差別行為はなくなったが、ドイツ圏では差別意識は厳然として残った。特にアカデミーの世界ではマールブルク大学のコーエンやハンブルク大学のカッシーラなどの一部を例外としてほとんどの学者が大学での正教授の地位を拒否された。この論文で扱う三人の哲学・社会学・精神分析学の先駆者の例もしかりである。

東方ユダヤ人にもう一度目を向けると、ガリチアではユダヤ人社会は大きな発展を見せていたが、それはポーランド王国が存続するまでのことであった。ポーランド王国は18世紀の初めまで西はベルリン、東はモスクワに迫り、北はバルト三国、西はウクライナを所領とする大王侯であったが、王位継承戦争をきっかけにプロシア・ロシア・オーストリア帝国が策謀する三度の領土分割によって1795年、ついに王国は消滅してしまった。そのことはつまりポーランド領におけるユダヤ人の地位・権利が危機にさらされることを意味した。19世紀にはいってもロシア領ではしばしばポグロムが発生していたが、1881年、アレクサンドル二世がユダヤ人を含む反政府組織に暗殺されると、官民あげての強力な反動が起こった。それによって十数万のユダヤ人が虐殺され、300万人がロシアから難民として出国した。その大半はアメリカ合衆国へ入国したと言われる。それ以降もロシアでは1915年に共産革命が起こるまでに大小規模のポグロムが発生し続けたと言われる。

第一次大戦後、東方ユダヤ人が敗戦によって排他的な規制が撤廃されたドイツに大挙して流入した。ワイマール共和国の時代、ユダヤ人は金融・交通・流通・金属加工などにおける資本力で他を圧倒していたと言われる。フランクフルトに限っていえば、市所属の弁護士の65%、医師の36%をユダヤ人が占め、ベルリンのデパート・新聞・雑誌業界はほとんどユダヤ人資本の寡占状態であった。しかし、彼らの出自はもともと先祖よりドイツで富を築いていた西方ユダヤ人であり、大半の東方系ユダヤ移民は貧しいままで、その日暮らしであったと言われる。M.トケイヤーが東方ユダヤ人がおかれた状況を象徴的に表現した言葉にLuftmensch（空気人間）があるが、この言葉は農業・製造業などの正業に就くことを許されず狭いユダヤ人街の壁の中に押し込められ、自らも空気のような軽い価値しか認められない東方ユダヤ人の歴史的悲哀をうまく表現している。王侯の財政を握る宮廷ユダヤ人（Hofjuden）はともかくとしてユダヤ下層市民とそれに対極の位置にある高学歴ユダヤ知識人Luftmenschの悲哀をなめさせられた経験をもったと多くの資料が語っている。そしてそういった経験はユダヤ知識人にとってひときわ辛いものであったであろうということは想像に難くない。

〈ジンメル型高学歴ユダヤ知識人〉

ジンメルは『社会学』の補遺の中で「距離と接近、無関与と関与」について論及し、疎外論を展開している。それは、ヨーロッパのユダヤ人は古来より地域社会との関わりが一貫して希薄であり、また隔絶されており、いわゆる疎外状

況の中で暮らしてきたというものである。16世紀のはじめにベネチアで最初のゲットーが開設されて以来、多くのユダヤ人が狭い空間に押し込められてきた。しかし、その疎外(Entfremdung)の見返りとして、いや疎外状況そのもののゆえにユダヤ人は歴史的にヨーロッパ世界の政治・経済・文化などあらゆる方面において状況観察とその認識・行動判断（それはもっぱら彼らの生存の可能性に関するものなのであるが）の「自由」を獲得した。ジンメルはそう考える。これはドイツの地で名望あるベルリン大学で博士号を取得して最高の知的エリートに達しながらも長く私講師の地位に甘んじ、晩年まで大学で正教授の地位を得ることがなかったジンメルの負けじ魂というか、屈曲した心情というか、一言でいえば不屈の精神の逆説的一手ともいうべき言説であろう。

「距離と接近、無関与と関与」― その各々対照構造をなす人間の空間的・存在論的カテゴリーのなかでの人間意志と意識のいわば絶えざる往復運動の中からまるで重層的な相互の影響界と非影響界を合わせ持つ磁界のようにその疎外状況から「自由」が思いがけなくポカリと浮かび上がるのである。

そもそも「距離」の意識は在住者・土着民の存在カテゴリーにはない。なぜなら在住者の存在形式は隣接であり、それは他者との区別なき同化を前提としているからである。大都会の狭隘な隣接空間の中でプライベートな個人意識も半ば失われてしまったことにも気づくことのない状況で他者との存在の差異の意識は失われて久しい。他者との生活空間の区別がはっきりしない所ではその空間の質的拡張は無制限であるがゆえに共同体内の人間関係も無制限な融合・溶解が図られる。そこでは地域の社会的な制約も義務も多く、それが一見わずらわしく思われても外部者による犯罪などちょっとした外的試練によってその障壁はあっさり取り払われ、自然なものとして受け入れられてしまう。ユダヤ人の多くはドイツを中心にヨーロッパ中で設けられたゲットーによって嚴重に在住者と居住範囲の区別をつけられ、昼間は外部へ出て決められた仕事をするこゝも出来たが、夜は監獄のように外部を結ぶ扉は閉められ、見張りがたてられた。ローマ人にあってもユダヤ人と状況はほぼ同じである。東欧地域では地域民と隔絶されてはいるが彼らが定住している場合もある。しかし西欧地域では定住はほぼ地域民に拒否され、移入が成功しても数ヶ月の後、他所へと追放されてしまう。

彼らは常に在住者と「接近と距離」を繰り返してきた。在住社会に関与しながら、同時にまた無関与を余儀なくされ、また自発的に無関心な態度をとってヨーロッパで千年以上の間生き延びてきたのだ。つまりヨーロッパの異邦人であるユダヤ人・ローマ人は当初より他者との「隣接」の状態にはない。いつも在住者の前でびくびくとし、おずおずと振舞って彼らの顔色を伺っている。われわれはこの状況を"Luftmensch"だとすでに確認した。二・三代もの間の辛苦に満ちた商いの後に蓄えた財を手にしてはじめて遠慮がちではあるが頭を上げ、地平線を見上げることができるようになる。まれに商いにすっかり成功した者はわずかではあるが市街の一等地に居を構えることができた。主にユダヤ人相手であるが医師や弁護士などの高級な職に就く者もいた。しかし、学問の世界

ではどうもその努力と才能に相応しい地位に就ける者は稀であったようだ。レッシングの盟友のメンデルスゾーンやカントの論敵ザローモン・マイモンなどはその目覚ましい学的活躍にも関わらず在野にとどまった。マールブルグ大学で哲学教授として定年までその職を全うしたコーエンは例外である。ハンブルク大学の正教授であったカッシーラもヒットラーが政権を握るとアメリカへ亡命した。ヒットラーが政権を獲って多くのユダヤ人知識人が亡命した事実は周知のとおりである。(注ヒューズ3)「ドイツにおいて学問の世界で地位を得、心おきなく仕事をする希望は捨てたほうがよい」というのはジンメル自身の偽らざる思いでもある。O.ヴァイニンガーはウィーン大学で博士号を取得したのにもかかわらず、それを印刷に付す問題で指導教授との間で話がこじれ、自暴自棄になったのか、かつてベートーベンが居室とし、当時、記念博物館となっていた部屋でピストル自殺をした。彼の行為は極端であるが、その心情は当時のユダヤ人知識人のものとしては典型的である。

〈 結論. 疎外と自由 〉

博士号取得指導教官がなかなか決まらず、最終的にユダヤ人の特任教授(Honorprofessor, 大学には在籍するが、どの学部にも属さず、専門学校の教師も兼ねる教員)に任される。そして提出した論文『音楽の初期段階における心理学的・民族的研究』(Psychologisch-ethnische Studien über die Anfänge der Musik, 1881)では、認定会議で論文の叙述形式に不備があるとして差し戻される。ジンメルはそれではとその代わりに懸賞論文に応募し、入賞した論文『カントの物理的モナドロジーによる物質の本質』(Die Natur der Materie nach Kants Phisukalischer Monadologie)を先の博士論文の代替として提出するも、それがまた二年後に他学生の論文の剽窃であるという嫌疑をかけられて学者としての出発の記念すべき時期にかなり気の滅入る状況に置かれていた。1885年には教授資格を得てベルリン大学私講師となるもその業績の多彩さに比べて彼の不遇は周知のとおりである。ハンブルグ大学やハイデルベルグ大学など、何度も推挙されながらも挫折を味わわれてきた。「希望」はもはや捨て去ってしまっていたのであろう。シュトラースブルグ大学の正教授の地位に就いたのは彼の死去の四年前であった。ジンメルの抽象的論理と背景としての彼の人生観を感じさせない表現は彼独自の矜持の現れであり、一部識者のジンメルの思想を彼の人生観から推量、抽出してはならない、という一見、冷静で客観的に思える指摘は当たらない。まさに彼の思想は彼の人生の疎外感から発しているのである。『社会学』の補遺に以下の短い文章がある。

今日訪れて明日もとどまる者 — いわば潜在的放浪者、旅は続きはしないにしても来訪と退去という離別を完全に克服していない者である。¹²⁾

異邦人は一定の空間的な広がりの中に定着しているが、しかし、この広がりにおける彼の位置は、彼がはじめてそこへ所属していないということ、かれがそこには由来せず、また由来することのできない性質をそこへもたらすということによって、本質的に規定されている。 — 近接と遠隔との統一 —¹³⁾

（異邦人はその職業的異動性・・・仲介業・金融業・・・によった）個々のあらゆる要素と接触するようになるが、しかし、血縁的・地縁的・職業的な定着によって個々の要素と有機的に結びつくことはない。¹⁴⁾

この状態のいまひとつの表現は、異邦人の客観性にある。異邦人は根底から集団の特異な構成部分やあるいは集団の一面的な傾向へとらわれてはいないから、それらすべてに「客観的」という特別な態度で立ち向かう。この態度はけっしてたんなる集団への非協力、もしくは反目ではなく、距離と接近、無関心と関与からなる特別な構成なのである。¹⁵⁾（確認）

客観性をまた自由とよぶことができる。

すなわち、異邦人は実践的にも理論的にも自由な人間であり、彼は状況をより偏見なく見渡し、それをより普遍的より客観的な理想で判定し、したがって行為において習慣や忠誠や先例によって拘束されない。¹⁶⁾

異邦人はかれの非有機的な順応にもかかわらず、それでも集団の有機的な成員であり、集団の統一的な生活は、この要素の特別な制限を含んでいる。ただわれわれはこの地位の独特の統一性を、それがある程度の近接とある程度の遠隔から合成され、それらの程度は何ほどかの量においてはいつさいの関係の特徴づけ、特別な割合と相互の緊張とにおいて「異邦人」に対する特殊な形式的関係を生むということには示すことが出来ない。¹⁷⁾

空気のような存在としての異邦人、そこに存在しながらまるではじめから存在しなかったかのような存在、マルクス・フロイト・ジンメルをはじめ多くのユダヤ人が知性の持ち主であればあるほどそういった寂寥感を抱いたことであろう。多くのものがその虚しさと戦うべく許された範囲の商業活動に従事し、高等教育の経歴伸張へと必死な努力をしたことであろう。その最も悲劇的な例が O.ヴァイニンガーである。前述のように彼はウィーン大学で学位を取得し、その博士論文を出版しようとしたがうまくいかなかった。一年後キリスト教に改宗し、論文を改訂した著作(*Geschlecht und Charakter*, 1903)の出版になんとかこぎつけた。

しかし、当初、反響はほとんどなかったらしい。同年 10 月、彼は当時、祈念館兼旅館となっていたベートーベン終焉の館で拳銃自殺した。マルクスは大学でのアカデミックな経歴に入ることを許されなかった。フロイトの状況もほぼそれに近い。ジンメルは最晩年になるまで大学の正員として認められなかった。

大学はアカデミックな分野でも実務に携わる弁護士・医師とは違ってかなり保守的である。この頑強な壁に阻まれて憤死したのはヴァイニンガー一人ではなかろう。ジンメルは異邦人としての自己を深く自覚しながら、そのどうにも覆すことのできない運命を悟り、そしてその試練のなかでなんとか自己の自尊心を守り生きてゆく術を見出すべくもがいていた。その苦悶を文化の創造と破壊作用という表象に置き換え、突破しようとした。

産物（つまり文化）は創造的生の容器であるが、しかしこの創造的生に再び見捨てられてしまう。¹⁸⁾

生がさらに進展するにつれて生に対してかたくなな懸隔を示し、いや生と対立するのがつねである。¹⁹⁾

文化形象がまったく完成されるやいなや、その下ですでに ―中略― つぎの文化形象が自己を形成しはじめている。²⁰⁾

これは異邦人の疎外状況とは一見、まったく異なる表象形式であるが、このいわば表象における自己疎外の高みから自己の位置と世界（文化）を見おろしたのである。ジンメルは絶えざる文化形成としての生の形式の交代をマルクスの言う「人間の自己疎外 (die Selbstentfremdung des Menschen)」にならって「生の自己疎外 (die Selbst-Entfremdung des Lebens)」とした。これはヘーゲルの意識としての単純精神が発展的「自己疎外 (Ent-äusserung, Entfremdung)」を繰り返しながら最も高貴で完全な神の領域にある「絶対精神 (der absolute Geist)」へと進展してゆく弁証法的階梯の構造を意図している。ジンメルはここでヘーゲルの精神 (Geist) をそのまま生 (Leben) に置き換えたものと見なすことが出来る。しかし、ジンメルは彼の「生の即自的発展」の思想の行きつく先に何を見ているのであろうか。ヘーゲルの対自的かつ対事物的発展形態としての絶対精神とは異なる何をジンメルは提示したかったのであろうか。ジンメルの時代の「客観的文化」はヘーゲルの弁証法的対自をそのまま受け入れるのは不可能である。しかし、ジンメルの論理の基本構図である主観と客観というカント的地平を捨てきれない姿勢には限界があるように思われる。「生」を単なる「精神」とは異なる事物と精神と歴史性を包含した全体として見ているとしてもそこから何を提示しているのであろうか。「より以上の生 (Mehr-Leben)」、「生より以上 (Mehr-als-Leben)」を提唱することによって何を示したかったのか。彼は異邦人としての寂寥感、やるせ無さ、虚脱感の中でそれを打ち破るべくこの魔術的な術語を産みだした。この言葉はニーチェやベルグソンに連なる生の哲学の俎上にあるのではない。そこには彼個人の状況とユダヤ人一般の境遇への嘆息が象徴的にシニカルに表現されているのを見逃してはならない。B. ラッセルがジンメルの哲学をして単なる「たわごと」とやや品性を欠く、乱暴な言葉で断罪したのは、ジンメルの諦念を精一杯に逆説的に表した思いがどうしても理解できない苛立ちからきたのだろう。

そして彼が大胆に、華麗に現代の、大都会の生の躍動を詩って30年も経たないうちに六百万人ものユダヤ人が老若男女を問わず生そのものを根絶しにされ、空気(Luft)の中に放散され、無に帰した悲劇とのコントラストに今さらながら驚かざるをえない。

参考文献

Simmel, Georg: Gesamtausgabe Band 14, 22 Bearbeitet und herausgegeben von Klaus Christian Köhnke suhrkamp taschenbuch wissenschaft Frankfurt am Main 2005.

Lessing, Theodor: Der jüdische Selbsthaß Matthes & Seitz Berlin 2004.

Ernst Bloch zu ehren, beiträge zu seinem Werk herausgegeben von Siegfried Unseld suhrkamp Verlag 1965.

ゲオルク・ジンメル 『社会学』 上下 居安正 訳 白水社 1994 年

ゲオルク・ジンメル 『ジンメル著作集』 5, 7, 12 酒井健一、熊沢義宣、杉野正、居安正 訳 白水社 1994 年

ゲオルク・ジンメル 『文化論』 阿閉吉男 編訳 文化書房博文社 1987 年

S. クラカウアー 『大衆の装飾』 舟戸満之、野村美紀子 訳 法政大学出版局 1996 年

スチュアート・ヒューズ 『意識と社会』 生松敬三 他訳 みすず書房 1970 年

スチュアート・ヒューズ 『大変貌』 荒川幾男他訳 みすず書房 1979 年

ピーター・ゲイ 『ドイツの中のユダヤー モダニスト文化の光と影』 河内恵子 訳 思索社 1987 年

H. ハウマン 『東方ユダヤ人の歴史』 平田達治 他訳 鳥影社・ロゴス企画部 1999 年

シーセル・ロス 『ユダヤ人の歴史』 長谷川真 他訳 みすず書房 1979 年

注

- 1) 『文化論』 25,74 頁参照
- 2) 同上 77 頁
- 3) 『文化論』 74 頁
- 4) 『大都市と精神生活』 283 頁 in: 「ジンメル著作集 12」
- 5) 同上
- 6) 同上
- 7) 同上
- 8) 同上 276,277 頁
- 9) 同上 279 頁
- 10) 同上
- 11) 同上
- 12) 『社会学』 285 頁
- 13) 同上
- 14) 同上 287 頁
- 15) 同上
- 16) 同上 288 頁
- 17) 同上 288 頁
- 18) 『文化論』 74 頁
- 19) 同上
- 20) 同上 75 頁